
ものくろセカイ

クーデレの神様

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ものくろセカイ

【Nコード】

N7302Q

【作者名】

クーデレの神様

【あらすじ】

前代未聞の病院ファンタジー。世界に色を見出せない少年と世界に色を付ける少女のボーイ・ミーツ・ガール。

（木立）代理投稿、隔日更新です。作品は書き終わっているので安心して読んで下さい。心理描写の上手さにいつも驚かされます。

(。∇。；ノ)ノ？(前書き)

予め御了承頂きたいのですが、病院に勤めたことはありません。
そのため、お見苦しい所が多々存在します。気にしないで下さい。

R A D W I M P S

A q u a T i m e z

好きです！

是非、そんな感じの曲を聞きながら、ゆっくり読んで下さい。

(。∇。；ノ)ノ？

題名…ものくろセカイ

「あなた、死の世界を見たことある？」

少女はそう言って僅かな笑みの残滓を僕に向ける。綺麗な、色素を抜き取ったような白い指が、虚空を掴んだ。

「綺麗なのよ。すごく、すごく。辺り一面真っ白で……それで」

「君は…誰…？」

白い息が、虚無の世界に漂う。やがてそれは形を崩し、星のない真っ黒な空に溶け込んでいった。

「私は知らない。でもあなたは知ってる。」

「…ここはどこ？」

「あなたが連れてきたんでしょ、ここに。」

少女は目を閉じると屋上の縁に、まるで悠々と綱渡りをするかのよう、ゆっくりと歩き始めた。僕の視界に飛び込んできたのは一粒の星。見上げれば、吸い込まれそうな夜空。そして、星の代わりに輝く満天の雪。背筋が震えた。

「綺麗だ、」

――怖いくらいに。

白と黒の不規則なワルツ。モノクロの世界を見ているようだった。少女は笑った。

「もっと綺麗よ？死の世界は、」

そして、ゆっくりと足を踏み外し、ゆっくりと屋上から落ちてゆく。思わず僕は、手を伸ばした。でも、届かない。届きそうで、ただ震えているだけの自分がいた。真っ白な雪が啼き叫んだ。少女の真っ黒な長髪が、風で靡く。

叫び声が聞こえた。それが僕自身のだと気が付く頃には、眩しい程の光が視界を遮っていた。

『……また炎霊祭の灰掃きに各地の住職、公共団体が集まり、今年も……』

ニュースアナウンサーの抑揚のない声が僕の鼓膜を震わす。目を開くとボンヤリと人の影が見えた。網膜に焼き付いた、あの少女の姿と重なって、咄嗟に手で振り払おうとする。だが僕の右手は何かによって抑えられていて、ピクリとも動かなかった。

「良かったー。随分うなされてたから、私、心配で。」

眩しい程の蛍光灯の光。その人影から声が聞こえた。優しい声だった。

「君は…誰？」

「あ、私、隣の南。南ユウカ。よろしくねー。」

何となく笑っているような気がした。それも何処か懐かしい笑みで。だから僕は何の根拠もないまま彼女の存在に安心したのだ。

「…ここはどこ？」

「…病院。覚えてないの？」

覚えてない、何もかも。どうしてここにいいのか。何をしたのか。肝心な部分が欠落していて、実は最初からないんじゃないかと、全部夢でしかないんじゃないかと、そう錯覚してしまうくらいに。僕の頭の中はフワフワしていて、自分という肉体に、風船のような意識が付いている感じ。

唐突に気怠い眠気が僕を襲った。真っ黒で、どっぷりとしたモノに、ゆっくりと意識を刈り取られていく。最後に見たのは、ギョツと僕の右手を握りしめる華奢な両手。ああそうか、そりゃあ動かない筈だ。

（。▽。；ノ）ノ

緑橋中央病院。緊急のERから臓器移植、MRIなどの医療機器を備えた町内一番の大型病院で、僕らは偶然にもそこで出会った。彼女、南ユウカの病名は知らなかった。互いに話そうとしなかったし、話す理由もなかった。

第一、僕自身、自分の病気が何なのかよく分からなかった。思い出そうとすればするほど、ポツカリと開いた心の穴に嵌まってしまつて必死に出ようと足掻き続ける。試しに交代で点滴を代えてくれる

看護婦さんに聞いて見たことがある。

「肝臓の病気よ。新しい肝臓が必要な。だから移植してくれる相手を見つけてるとこ。安心してすぐ見つかるから…」

でも結局、そうやってはぐらかされた。肝心な所は言わない。それが大人だ。

ユウカは笑っていた。

「あはは、春樹君、私と同じこと言われてるー。みんな、すぐ、すぐ、って言うけど。もう三ヶ月。全然すぐじゃないんだからっ。」

僕らは何となく似ていて、他人なのになぜか他人じゃない気がした。屋上が好きなこと。

縁日の焼きそばが好きなこと。

水族館が好きなこと。

シャボン玉が好きなこと。

好きな色。

好きな音楽。

好きな雑誌。

好きな季節。

全部同じで、でもそんなことにドキドキしているのは僕だけで。ユウカはいつもと変わらない何処か懐かしい笑みを浮かべる。

“それで”

それで良いと思えた。

「なにになに？ねえ、何で笑ってるのよー。」

「プフツ。ユウカ、頬っぺにご飯粒付いてるっ。」

「え。ちょ、やあああっ／＼見るなあーっ／＼」

カーテンがレールの上を滑る乾いた音がする。同じ部屋の中、薄っぺらな布一枚越しにユウカの慌てた姿が浮かんで、また笑みが零れた。

「わ、笑うなあっ！／＼」

「笑ってない。笑ってないっ♪」

学校に通って、くだらない授業を聞いて、部活で暇をつぶして、帰路につく。友達と訳も分からず笑いあったりして、親に反抗したりして、ふとした景色に感動して、世界に絶望して、世界に希望を持ったりする。人がそれを日常と言うなら、僕はユウカと一緒に居る、この時間こそが日常であった。

（。∇。；ノ）ノ

「南さーん、検診の時間ですよ。」

南向きのこの部屋には、僕とユウカの二人しかない。二人とも点滴を繋いでいて、移動する度にガラガラとガートル棒が音をたてる。部屋の真ん中には小さなテレビ、オーディオ、お見舞いのドライフラワー。他は細かい私物だけの殺風景な状態だった。

そんな数少ない私物の中、僕の目覚まし時計が6時を刻んだ。辺りはもう真っ暗だった。

「あー、もう検診の時間かー。ま、帰ったら『月影バンパイア』の続き話してあげるから♪寝ちゃダメだからねーっ。」

病室の扉が音もなく閉じる。

この時間帯、ユウカは決まって検診のため看護婦さんに呼ばれる。検診の内容は知らないが、僕にとってユウカのいない時間は暇以上の意味を持っていた。

窓の外を見遣れば、吸い込まれてしまう位に何も存在しない夜空。都心の酷く汚れたネオンが星という星を食べ尽くし、後に残るのはベールのような雲に姿を隠す朧月。外の世界には色がなかった。いや全部同じ色に見えた。病室が殺風景なら、外は無風景とでも言え
ばいい。

例えるなら、それは真っ黒な、
真っ黒な――――

「綺麗ね。」

夜空と、世界と同じ色をした長髪がフワリと僕の視界に舞い込んだ。対比したように真っ白な指が、淀んだ窓ガラスに触れる。背筋が震えた。

「そうは思えない。」

「どうして?」

「色がないんだ。」

「どうして?」

「分からない。」

「見ようとしてないから、じゃない?」

「そうかもしれない。」

「綺麗よ？」

「見たくないんだ。」

「何を？」

「分からない。」

少女は笑った。

何処か。何処か懐かしい笑みで。

「変なの♪」

振り返った少女の軌跡を真っ黒な長髪がなぞっていく。自分が分からなかった。何を見ているのか。何をしているのか。どこにいるのか。何を考えているのか。何一つ。何一つ分からない。あの窓ガラスに映っている少年は、誰だろう。思い出そうとすればするほど、ポツカリと開いた底無しの穴に落ちてしまいそうだった。

「僕は誰なの？」

「それは、あなたが知ってる。」

「君は誰なの？」

「それも、あなたが知ってる。」

「じゃあ、どうして分からないんだ？」

「見ようとしてないから、じゃない？」

そう言うのと少女は笑った。

胸が痛かった。話す度にズキズキして。痛くて、痛くて。視界が歪んだ。胸を抑えた僕の手はドロリと、真っ黒な血で溢れている。ナイフが刺さっていた。

痛くて、

痛くて、

痛くて、痛くて。

でも震えているだけ。

「綺麗よ、死の世界は。」

少女は笑った。

(。▽。；ノ)ノ

気が付いたら別の部屋にいた。

頭痛と吐き気を同時に催すと人間は覚醒するらしい。僕はまだフラフラする意識の中、吐くものすらないまま嘔吐を繰り返していた。

「春樹君っ！」

突然、横っ腹にタックルを噛まされる。ガクガクと視界が揺れ、吐くにも吐ききれず僕は胃液の混じった咳をした。ユウカだ。

「良かったー……………」

…全然よくない。

でもユウカは、そんなことお構いなしに、今度はボディーブローを繰り出した。

「私が検診から帰ったら、春樹君が発作を起こしてて、それで看護婦さん呼んで、そしたらお医者さんも来てくれて、春樹君、違う部屋に連れてかれて、でビビっ、ドーンってなって、何回も繰り返して、私、ホントに春樹君が居なくなっちゃうかと思って、それで……」

ユウカは泣いていた。涙と鼻水が僕の服にシミを付けていく。押し当てられた小さな拳が震えていた。どうしようもなく、何を言ったら分かんなくて、僕はその手を掴んだ。冷たかった、驚くほど。そうか。ユウカはずっと側に居てくれて、こうして僕が目覚めるのを待っていてくれたんだ。そう思うと、涙が溢れた。

「ど、どうして春樹君が泣いてるの？」

「分からない。」

分かった。だから、笑えた。

「変なの♪」

ユウカも笑った。

幸せだった。惨めに泣いて、馬鹿みたいに笑って、泥臭く生きて、こうしてユウカと触れ合える、ただただ幸せだった。

そこから2時間ぐらい、ユウカの話す『月影バンパイア』を聞いていた。バンパイアと三角関係と一方通行の何ともドロドロとした少女漫画で、ユウカは

「ツツキーがイケメンなんだよ！主人公の幼なじみで、あ、ツツキーって月野君だよ？それでなんと、――」

とか、五割方、ツツキーこと月野君の話をしている、僕はその度に苦笑を漏らした。

『月影バンパイア』の話を終えると、ユウカは疲れていたのか眠ってしまった。小さく寝息をたてる、その肩にそっと毛布をかける。

ユウカはそういった少女漫画が好きだ。三角関係とか一方通行とか。僕も嫌いじゃなかった。でもそういう話をする度に、ユウカに彼氏がいるんじゃないかと、以前付き合ってた人がいるんじゃないかと、後から思い出せば笑ってしまう程、馬鹿な想像をしてしまうのだ。

ふと、不思議に思った。僕は何一つユウカのことを知らないのだ。知ってることは、それこそ趣味とか好みとか下らないこと。家族とか、学校とか、果てまで年齢さえ僕と近いとしか知らなかった。それでもユウカの存在は、何処か懐かしく思えたのだ。不思議だった。

(。△。；ノ)ノ

(。A。；ノ)ノ？

三日もすれば、僕は元の部屋に戻された。部屋に帰るなりユウカはクラッカーを鳴らし

「退院おめでとー♪」

とか冗談を言って、パーティーを始めた。僕も悪い気がなくて、秘密に買ってきた小さなケーキを二人で食べた。

その後はいつものようにユウカは検診に行き、看護婦さんが体温を測りにやってくる。一日が終わる前までの下らない雑談、暇つぶしに見るテレビ、聞き慣れた音楽を流すオーディオ。どれもこれも元の日常だった。

『：東北方面は雪になるでしょう、また明日は炎霊祭のため各地で優雅な火の塔が…』

機械のような抑揚のない声が特徴のニュースアナウンサー。電気を消した薄暗い部屋の中、僕とユウカはお互いのベッドに転がりながら、そのレトロなテレビを見ていた。

「炎霊祭かあ。私も見に行きたいなあーっ。」

ユウカはそう言って小さく伸びをする。

今年もこの日がやってきた。二年に一度の1月32日。僕達の国は大きな祭をやる。炎霊祭。誰が始めたのか、どういう理由で始まったのか、そういう歴史は有耶無耶で。でも、この国ならではの特別な行事であった。

炎霊祭が近くなると、町中におかしなオブジェが立ち上がる。まる

で不格好な塔のようなもの。骨組みは矢倉型に建てられた木々。でも、中に積まれているのは古くなった机とか、壊れかけの棚とか。少し探せば古本の山やら、古着の山やら。とりあえず燃えそうな物は積まれて塔になってゆく。そして、奇妙な塔は1月32日の午後10時10分、一斉点火で燃えるのだ。もちろんただ単に燃えるだけではなく、ちゃんとした意味がある。曰く、万物には神が宿っていて、使われなくなった物にも神はいるから、それを炎とカして天に送り返すだとか何とか。

でも僕ら十代には、そんなことはどうでも良くて。専ら噂になっているのは、炎霊祭の時にお願いをすると叶うとか、塔の周りを三回好きな人と回ると結ばれるとか、そんな下らないことばかりであった。

酷くなると、何を勘違いしたのか、高校三年生のための最後の行事とか言つてとてつもない塔を建てたり、はたまた花火職人はここぞとばかりに気違い沙汰な塔を建てたり、そうすると今度は消防署も黙ってはいなくて、炎霊祭のために総動員万全配置、塔が崩れ火事になるものなら、それこそ電光石火で飛んでくるのだ。そんな国を挙げての一大イベント、炎霊祭。

ユウカは、それを見たい、と言い出したのだ。

「緑橋の河川敷で塔が建ってるし、明日見に行く？」

そういつて消毒薬の臭いがする枕に顔を埋める。

病院から少し離れた所にある河川敷、そこにも塔が建っている。たぶん、地元の人が寄付したんだろう。家具やら何やらで結構な高さになっていると聞いた。

でも、ユウカは首を横に振った。

「ほら私達、点滴ついてるし……」

そして、消え入りそうな笑顔で呟いた。

「……もつと近くで見たいの。」

僕は言葉を失った。何と言えいいか分からなかった。容易に思い浮かんだ言葉は、何だか全部まやかに思えた。だって、初めて見る表情のユウカだったのだ。

胸が痛かった。

本当に、僕はまだユウカの全部を知っている訳じゃないという、そんな事実が僕の喉元に押し当てられた。思ったり悔しくて、ギュッと毛布を掴んだ。触れられる程近くににいるのに、その時ばかりは彼女を、少し遠くに感じたのだ。

「え、えへへー。冗談冗談♪

っていうか、今年もテレビでやるでしょー♪今年こそは見逃さないんだからねっ。春樹君も絶対に夜更かし決定だよっ！」

そう言っつていつもの笑顔を浮かべるユウカ。

探しても、探しても、言葉なんてものは見つからない。行き当たるのは壁ばかり。でも、馬鹿なことは沢山見つけた。だって、僕はまだ十代だ。馬鹿なことを沢山やって、後悔して、明日になったらケロッと忘れてしまつて、大人という生き物になったら、ああ、アレが青春かと気付く。

誰が言っていた。

『意味のないことを馬鹿みたいにやるのが青春ってやつなの！青春？分かる？』

何処かで見たような懐かしい笑顔。色素を抜き取ったような真っ白な指が僕の頬に触れた。

分かっている。

だから、笑った。

「造ろう。」

僕の中で何かが変わっていくのが分かった。それが何なのかは、良く分からなかった。

(。▽。；ノ)ノ

「ちょっと篠田君、やめなさいっ。」

雲一つない晴天。1月32日。今日は炎霊祭。病院の前に開けた庭のような広場で、僕は看護婦さんに呼び止められた。仕方なく、片手で持つには大変だったボロボロの机を地面に置く。

「これいらないうって言っていましたけど？」

「そうじゃなくてっ！君は、まだ病人なのよ？分かってるの？そんな状態で今から炎霊祭の塔を建てるなんて、無理に決まってるじゃないっ。」

僕が今しようとしていることは、炎霊祭の塔を病院に建てること。正直、無理なんて百も承知だった。僕は病人だし、今は療養中。でも、だからこそなおさら、僕は何かを変えたかったのだ。必死だった。

「何で無理だって言えるんですか？」

「仮に無理じゃなくても、塔が倒れたらどうするのよ！？矢倉も建ててないのに。それに、ここは病院よっ？」

看護婦さんも必死だった。

言ってることは何一つ間違っていなかった。こんな事をすれば、こうなると僕自身全部分かっていた。

「これ以上続けるなら警備員を呼ぶわよっ！」

でも、どうしようもなかった。どうすればいいかなんて、僕には二の次だった。ただ、何かをしなきゃ崩れてしまいそうで、このまま何処かに流れて行きそうで。

ユウカの何だか懐かしい笑顔も、世界と同じ色をした髪の少女も、僕が何故ここにいるのかも、

何一つ僕には分からなくて、だから、何かを変えてやりたかった。ここで見失ったら、永遠に掴めない。そんな気がした。

結局、警備員を呼ばれた。多少対抗したが、大人という生き物は容赦ない。二、三人に羽交い締めになれ、あっという間に病院のロビ―に連れてこられた。

馬鹿だ、と思った。

もちろん。僕が、だ。

看護婦さんは優しく微笑んで、僕を宥めてくれたが、全部上の空だった。

昨日のユウカも、笑っていた。

『あははー。春樹君、やっぱり面白いね♪無理無理、どうせやろうとしたって看護婦さん達に止められるよ。準備もしてないしさー、それに、それに……』

でも、その目は涙を流さずに泣いていた。

どうしようもなく動かない社会の壁が、僕の前に立ち塞がったのを感じた。大人になるっていうのは、馬鹿な夢を捨てることだ。捨てられた夢は一つになって、社会っていう下らない世界を作る。色がない世界。僕もユウカもずっとモノクロの世界を見てきたんだと思う。どんなに必死に走ったとしても、モノクロの世界からは逃げられない。

きつと、未来の僕には色がない。

ただただ憂鬱だった。

たぶん、そんな時だった気がする。いつの間にか、誰かが僕の隣に座っていた。

「あんた、おもしろーな。」

病院のロビーは広々としていて、お見舞いに来る人達や、診察を受けに来る人でいっぱいだった。僕が座っている中央の、柱を取り囲むソファー。そこにも沢山の人がいる。

でもそんな中、僕の隣に座る男は異質だった。火の付いていないタバコを銜えて、タバコの作業着を着て、タオルのハチマキ巻いて。もちろん知らない大人だった。

だから、何も言わず前を向いた。

「塔、造ろうとしたんだろ？」

そして、その一言でハッとさせられた。もう一度男の顔を見た僕は、その目に惹かれた。色があった。

「名前は？」

「篠田 春樹。」

「俺は斎藤。よろしく。」

（。∇。；ノ）ノ

僕がもう一度ナースセンターに行くと看護婦さん達は露骨に嫌そうな顔をしていた。

「塔を造らせて下さい。」

今度はきちんと頭を下げをお願いした。さっそく奥の方では警備員を呼ぶ電話しているようだった。しばらくすると、一人の看護婦さんが僕の方にやってくる。

「いい？病院は、そういうことをする場所じゃないの？分かる？病院は治療して、療養して、病気を治す所なのよ。」

「分かってます。でも……」

「でもないの。出来ないことは出来ないのよ。」

僕は諦められなかった。理由はイマイチはつきりしなかった。でも、どうしても塔を造らなければいけない。そのための理由なら造ってる途中にでも見つければいい。笑える程馬鹿な根拠だったが、僕はそんなちっぽけな物に縋り付くので必死だった。

「出来ないことって何なんですか？」

「だから…」

「出来なさそうだからって、何で出来ないって決め付けるんですかっ！」

時が止まった。

いや、それほど静かだった。

「出来なさそうなことも、諦めないでやってみたらいいじゃないですか。そうやって諦めるから、何にも出来ないって思うんです。そういう自分から逃げていたくないんです。この機会を失ったら僕は永遠に自分から逃げてばかりになってしまおう。だから、塔を造りたいんですっ。出来ないことをやってみたいんですっ！」

息は途切れ途切れになっていた。固く握りしめたはずの拳が震えた。出来る限りのことはしたと思う。頭が熱くて、フラフラした。僕を形作る何かが剥がれ落ちていく。不思議な気分だった。今確かに、ここにいるはずなのに実感が湧かないのだ。

だから、警備員が僕を押さえ付けに来た時も、何一つ抵抗出来なかった。

でも、きちんと動き出していた。

「やめなさい。」

ゆっくりゆっくり、少しずつだけど、それでも良かった。

「∴彼を離してあげなさい。」

(。▽。；ノ)ノ

(。A。；ノ)ノ？

お茶の入ったコップとガラス張りのテーブルがぶつかつた。コトリッ。酷く淡白な音が僕のもとに届いた。

どうやらここは、特別な応客室のようだ。部屋にあるのは、高級そうなソファーとか、平原とおばさんが描かれた絵画とか、シャンデリア風の電灯とか、どれも僕には程遠くて、どれも僕を緊張させた。そして僕の目の前に座っている、どこかサラリーマンを想像させる男。白髪混じりのオールバック。分厚い眼鏡。ピツシリとしたスーツ。男は、一口お茶を飲むと財布から一枚の名刺を取り出した。

「この病院の管理を勤めていると言えはいいかな。田中です。」

田中さんはそう言って僕の目を覗き込んだ。何だか全てを見透かされているようで、無意識に背筋を伸ばした。

「えーと、篠田君でしたっけ？ うんうん。君の考えは実に面白い。私もね、何か患者に楽しんで貰えることがしたくてね。いろいろ悩んでいたんだけど、まさか患者の方から提案があるとは……」

もう一度お茶を飲むと田中さんは、一枚のチラシを渡してくれた。この病院の炎霊祭のチラシだ。

「で、まあ、こういうのを急遽作らせたけど、具体的にどうやって塔を造りましょうかね。」

眼鏡越しに田中さんの眼光が見えた。待っていた言葉だ。正直、口の中がカラカラだった。緊張で上手く考えがまとまらなくて、幾つ

もの単語が頭の中を飛び交う。それでも僕は、一文字一文字、斎藤さんが言ってくれたことを思い出して伝えていった。

『表がダメなら裏に作りゃあ良いじゃねえーか。裏は緑橋の方に続いているから、水を供給するのにそれほど苦労しねえ。消防署も近い。それに、俺は建築士だ。ちよいと師匠の見舞いついでに塔の矢倉ぐらいは造ってやれる。』

「……なるほど、」

田中さんは神妙な面持ちで頷いた。そして何かを決めたとしても言うように再び僕の目を見た。

「ここは病院です。もし塔が倒れた時の被害も考えて半径20メートルはとって、さらに、消防車も予め一台配置。これを吞めるならいいでしょう。」

もちろんだ。

僕は頷いた。必死になって虚空を掴んでいた僕の手には、いつの間にか一本の紐が握り締められていた。その紐は、細々としていても切れそうで、それでも全てと繋がっていたのだ。

(。▽。；ノ)ノ

裏口から出ると、1月の冷たい風が僕を突き刺した。裏側は北向きで太陽の光が三階建ての病院によって遮られている。こんなに寒いならコートとか持ってくれば良かったと思った。

「おーいっ。篠田っ！」

遠くの方で一台のトラックが止まっている。そのトラックに寄り掛かりながら、ハチマキタオル巻いた斎藤さんが手を振っていた。荷台には何本もの木々、ロープ、梯子と最小限の準備がされている。何だか急にワクワクしてきて、点滴が付いているのも忘れて走り出してしまいそうだった。

「ガハハっ！ほらな？言う通りになったろ！？ガキが必死に頼み込んだら、大人の一人や二人は動くんだよ！」

田中さんのやり取りを斎藤さんに話すと、斎藤さんは僕の背中をバシバシと叩きながら笑っていた。僕も嬉しくて笑ってしまった。だから、何だか全部上手くいきそうな気がした。

「さて、さっそく造ってやりたいんだかな……」

でも壁は、いきなりぶつかってきた。斎藤さんは渋い顔を見ると、僕の背中から手を離れた。

「残りたった12時間ぐらいしかねえのに、今日非番なのは俺と茂野二人だけなんだよ……人手が足りねえんだよ……」

茂野と呼ばれた時、トラックの助手席から眠そうに瞼を擦る男が降りてきた。その茂野という男と僕も合わせて三人。今、この状況は大変厳しいものだった。

炎霊祭の塔を建てるためには、矢倉だけを建てる訳にはいかない。矢倉はあくまでも塔を支えるための補強材のようなもので、燃やすための中身がないと、矢倉を組む意味がないのだ。

でも布石は打ってある。
後は信じるだけだった。

その時、裏口の扉が開け放たれた。振り返った僕は思わず声をあげそうになった。滑らかなセミロングのストレート、僕と同じ患者の服、息を切らしながら片手にはチラシを握り締めた、そんな。

「春樹君のバカッ！
なんで私も誘ってくれなかったの！？」

そんな色のある少女。

南 ユウカ。

ユウカは一仕切り、僕に愚痴を言った挙げ句。
今度は、

「なんで春樹君はいつもいつもーっ！」

なんて頬を膨らませて、

斎藤さんは、

「なんだ？彼女いたのか？」

なんて僕らをからかって。

僕自身、

「誘ったはずだったんだけどなあ。」

なんて言って頭を掻いて、

ただ、そんなことよりユウカが側にいてくれただけで世界が色鮮やかになったことに、僕は、すごく嬉しく思ったのだ。

そしてついに、

僕らの炎霊祭が始まった。

ユウカと僕はひたすら看護婦さん達から使わなくなった物を貰って、

斎藤さんと茂野さんも土台となる矢倉を造り始めた。田中さんが作った炎霊祭のチラシは僕が提案した物で、なるだけ見た人が手伝ってくれるようにと病院内に配った。

最初の2時間ぐらいいは僕ら四人だけの小さなお祭りだった。

でもその内、入院している子供達を手伝いたいと言い出し始めた。子供でも人手は人手だった。チラシを配るように頼んだり、いらなくなった雑誌とかを運んでもらった。

やがて、お年寄り達も動き始めた。三階の竹沢さん、梅さん、米さん。斎藤さんの師匠も何だか

「これ斎藤っ！何度も言ったら！矢倉は土台の積みが大事！」

とか、怪我をしているのに僕達に手伝ってくれた。

そして、疎外していた大人達も少しずつ人を増やしていった。動ける人は、みんなで重い棚を運んだり矢倉を造ったり、連絡先を持つ人達は地元の人や家族を呼んだりした。

そうすると、病院の人達も動かざるえなくなったようで、出来る限り患者に負担をさせないように必死だった。

気がつけば、ものすごい人の数だった。チラシを見て来た人とか、僕らの姿を見て来た人とか、呼ばれて来た人とか、面白そうだから来てみた人とか、そういう人で裏口はいっぱいになった。

「すごいね……」

星のない夜空が広がる午後8時。ユウカはそう言って、窓ガラスから見える、不格好な塔に集まる人達を眺めていた。

「これからだよ、すごいのは。」

斎藤さん達は汗を流し、矢倉を造っている。手伝えない人達も暗闇の中、ライトで塔を照らしている。みんな一つのことで必死だった、まるで、全員が繋がっているんじゃないかと、そんな風に思えるく

らしい。

「…よし！もういっちょっ行きますかっ！」

ユウカは笑った。

ここにすることが全部夢のように感じた。

「行こう。」

ただ、掴んだユウカの手だけは現実であって欲しいと願った。

(。▽。；ノ)ノ

「ああ、篠田君。」

塔の部品を運んでいた時、一人の看護婦さんが僕を呼び止めた。仕方なくいらなくなったボロボロの椅子を地面に置く。看護婦さんは最初に病院の庭で僕を呼び止めた人だった。

「朝はごめんね。私、すごいパニックになってて、痛かったでしょう？本当にごめんなさい。」

そういつて頭を下げた。でも僕自身、もう気にしていなかった。こうして斎藤さんや田中さんに手伝ってもらってここまで来たんだし、それにこれは全部僕の我が儘でしかなかったから。

「いいんです。こうして塔が建ったんですから。」

僕はもう一度椅子を持ち上げると、看護婦さんは手伝わしてくれと言いつ出した。

「せめてもの償いだから。」

そうして、看護婦さんと椅子を持ち運ぶと、外では、どんちゃん騒ぎになっていた。どうやらこれが最後の部品らしい。みんなオーエスオーエスとか言って、椅子はあつという間に頂上まで運ばれていた。少し離れた所でユウカも楽しそうにオーエスオーエスと合わせている。笑みが零れた。

「……ユウカちゃんがあんなに笑うようになったのは、篠田君が来てくれたからよ。」

看護婦さんは何か遠くのものを見るようにそう言った。驚いて振り返った。

「ユウカは前から、あんな風じゃなかったんですか？」

「いいえ。篠田君が来る前までは、ご飯も食べてくれなくて……、」

「どうしてそんな……」

正直信じられなかった。ユウカはいつもいつも僕を笑わせてくれて、僕の方が元気づけられた。だから、ご飯も食べれない程に暗いユウカなど想像できなかったのだ。

「お姉さんが亡くなったのよ。」

何かが僕の中で震えた。

「ユウカちゃんは、ここに来る前も病弱でね。お父さんお母さんは

ずっと忙しくて、お姉さんが唯一お見舞いに来てくれたの。すごく仲が良かったんだけど、お姉さんの方が突如亡くなってしまって…
…不慮の事故だったそうで…」

「……そうですか…」

ユウカのことはもちろん何一つ知らない。でもそうやって辛いことを秘密にってしまうユウカがユウカらしいと思った。

もう片方の僕は、何だか怒っていて、ずっと一緒に居たのに何で何も話してくれないんだとか言っていた。

ただ、今一番の思いは、怒ることでもなくて、悲しむことでもなくて、ユウカの側に居たいと思うことだけであった。

（。∇。；ノ）ノ

(。A。；ノ)ノ？

時刻は午後10時丁度。冷たい北風は一層勢いを増し、裏口に犇めく人々は輪を作り息を潜める。その中央、不格好な一本の塔が建っていた。三階建ての病院にも負けそうにない高さ。ついに完成したのだ。

斎藤さん達が造りあげた矢倉は、北風なんかにはビクともせず塔を支えている。田中さんのチラシも多くの人を呼んでくれて、病院の裏口には患者や看護婦さんやその身内とかでいっぱいだった。少し遠くには消防車も待機している。

点火まで後10分。

みんなは田中さんの感謝の言葉を聞きながら、今か今かと待ち侘びていた。どうやら点火は田中さんがやるようだ。

「うわっ！すごい、人でいっぱいじゃん……。」

遅れてやってきた僕らは、裏口いっぱい広がる人々を見て嘆息を吐く。この中で座る場所を見つけるのは大変そうだ。しばらく見回していると、斎藤さん達の所に丁度二人分場所が余っているのを見つけた。

「ほら、あそこ！斎藤さん達の所。行こ、行こ♪」

ユウカは笑って僕の手を引いた。

「…………。」

でも僕の足は動かなかった。

「どうしたの？」

何だか全部が懐かしいと思った。背筋が震えた。例えれば、何千年前、何億年前から、していた約束を思い出した感じ。脳裏に焼き付いた記憶と今見ている光景が重なった。ぼんやりとしていて、よく分からなくて、でもこの約束を果たさなければいけない気がした。

覗き込んだ先には、永遠の闇が見えた。吸い込まれてしまいそうだった。凍える程に冷たかった。

ただ、こわかった。

怖い。恐い。こわい。コワイ。

でも、ユウカとなら：

僕は走り出していた。

側にはユウカが居た。

『：どうして分からないんだ？』

『見ようとしてないから、じゃない？』

少女の言葉が響いた。

そうかもしれない。

きつと、そうだ。

ユウカのこと、本当は僕が一番知りたくなかった。

大人のことも、本当は僕が一番知りたくなかった。

自分の病気のこと、本当は僕が一番知りたくなかった。

この世のことも、本当は僕が一番知りたくなかった。

「ど、どこ行くの？……ねえ、春樹君！？」

忘れていた。

でも、少しだけ思い出した。

「屋上。」

(。▽。；ノ)ノ

シンと静まりかえった病院の中を走り抜ける。階段を駆け上がり、屋上の錆び付いた扉を開くと、星のない夜空が飛び込んできた。辺り一面真っ暗で、僅かに塔の方だけが明るかった。

そして、屋上の縁。夢と同じ風景の中、世界と同じ色の髪をした少女がいた。

「看護婦さんから聞いたよ…」

息があがっていて、途切れ途切れの声で僕はユウカに尋ねた。

「お姉さんが居たんでしょ？」

ユウカはそれを聞くと、急に押し黙ってしまった。ユウカが存在が揺らいだ。消えてしまいうさだった。だから、一生懸命その小さな手を掴んだ。

「お姉さんの名前は……？」

長い沈黙が、夜空の上を流れ星のように滑り落ちた。ユウカは泣いていた。涙は頬を伝い、暗闇の中に溶け込む。嗚咽が、この色のない世界に反響する。

やがて、ユウカの口からポツリポツリと言葉が零れた。

「……南ユリカ。」

知っている名前だった。

脳内が痺れた。何かが僕を貫いていく。全てが見えた。そんな気がした。

ユウカの言葉を、見失わないように、丁寧に、一文字ずつなぞっていく。

「……南ユリカ。」

『名前は……？』

『へえ、春樹って言うだ。』

『私？』

『南、南 ユリカ。』

『違うってばっ』

『青春、分かる？』

『ばっ／＼／そうじゃなくってっ！』

『えー、なにそれ。』

『あははっ。春樹君、おもしろいっ』

『ほーらほら、いるの？ いないの？』

『春樹君っ♪』

世界と同じ色の髪の少女が口を開いた。

『思い出した？ 春樹君？』

ああ、全部思い出した。

ここにいる理由も、ユリカのこと、あの約束のことも全部全部。

僕とユリカは同じ学校出身の彼女彼氏の関係だった。どうやって出会ったのかは忘れた。でも、僕は彼女の事が好きだった。腰まで伸びた光沢を放つその長髪も、病的なほどに真っ白なその指も、いつも僕を元気づけてくれるその笑みも。

デートもした。キスもした。一緒にゲーセンに行ったり、お祭りに行ったり、食べに行ったりした。もちろん、1月32日の今日、僕らはクラスみんなが造った炎霊祭の塔を見るため、屋上に行こうと約束をしたのだ。ユリカは来るはずだった。来ないなんて微塵も思わなかった。

でも、ユリカは、車の事故で亡くなった。

その日から僕の世界には色がなくなったのだ。ユリカの居ない世界なんて酷く滑稽に見えた。僕が今まで居た世界が、本当はモノクロの世界でしかなくて、ゾツとした。

だから、死のうとした。

何をやったのかは忘れた。

だけど、まだ生きてる。

死のうとして死ねなくて、結局僕は、この病院に辿りついたのだ。
そして、ユウカと出会った。

全部つながった。

ユウカの何処か懐かしい笑みも、
屋上の夢をよく見ることも、

世界に色がない理由も、

炎霊祭の塔を建てようと必死になったことも、
世界と、いや綺麗な黒の髪をしたユリカのこと、

『ほら、全部見えたら綺麗でしょ？』

まだ生きている自分が、実感できなかった。

俯いたユウカの姿がボヤけた。

ああ、違う。僕が泣いてるのか。

「なんで春樹君が泣いてるのさ。」

「分からない。」

分かった。全部。

だから、笑った。

「変なの♪」

ユウカも笑った。

どこかユリカと似ている、僕が好きなユウカの笑みで。

『また、ね。春樹君』

その時、ユリカとユウカの姿が重なって、ユリカは僅かに霞み、消えていった。触れようとして、すり抜けた。ただ、どうしもないこの思いが胸の中で暴れ回って、指先が、足が、僕の体が、震えるだけで、こんな冷たい冬に、暖かい気持ち、やけにはっきりと、僕に伝わって、ゆっくりと、そっと、ユウカを抱き寄せた。

何処か遠くで点火のカウントダウンが聞こえる。相変わらず星一つない夜空。雲の隙間に姿を隠す朧月。ゆっくりと、ただゆっくりと時間が過ぎ去る。

きっと今、宇宙から見たから、この星は真っ黒に見えるだろう。こんなに真っ暗な世界の中、僕は手探りで彼女に、ユウカに触れた。ユウカも震えていた。

きっと、地球が終わっても、人という存在がいなくなっても、たった今、宇宙人が攻めてきても、僕らがここにいたというちっぽけな、そんな微かな色は消えない。

唇が、

ユウカの唇に触れた。

時が永遠のように流れた。永遠なら、急ぐ必要もないのに、僕らは何度も、何度も、互いを失わないように、口付けを交わした。

そして、

ゆっくりとユウカを地面に押し倒し、僕は。

乾いた音がした。

二人して驚いて、音がした方を見遣れる。そこには、

僕らの点滴を繋ぐ、二本のガートル棒が倒れていた。すっかり忘れていた。僕らは点滴をする程の病人なのだ。

二人して顔を見合わせ、二人して笑ってしまった。

一仕切り笑い終えると、ユウカは立ち上がり、楽しそうに裏口の方を指差した。

「春樹君っ！あれっ！すごいよっ！塔が燃えてるっ！」

「すごい……」

塔は燃えていた。炎は轟々と火花を散らし、天にも届きそうな咆哮をあげていた。使わなくなった本棚、古くなった丸テーブル、ボロボロの椅子、読み古るされた雑誌、埃を被ったナースの服、そういう物達が最後の輝きを放つように、舞って、踊って、光に姿を変えるのだ。

「ねえ、見てほらっ！向こう！」

ユウカは僕の手を握ると、無邪気な子供のように叫んだ。感動で震えた。

燃える塔は一本なんかじゃなくて、次第にその数を増やしているのだ。一本、また一本。炎の塔はさながら暗闇の道標のように光を作っていく。綺麗だった。

他に言葉はいらなかった。

だって世界には、こんなに綺麗な色があるのだ。

「炎霊祭…か……。」

ギュッとユウカの手を握りしめる。冷たい北風が吹き抜けた。

その時、流れ落ちる星を見たのだ。ゆっくりと夜空を舞う星。綺麗な星、触れたら消えてしまいうような、そんな儂い星。見上げれば、星の代わりに輝く満天の雪。ため息が零れた。

「綺麗だ。」

怖くはなかった。ユウカがいるから。

そっとユウカの方を向く。雪のせいか、はたまた偶然か。僕らは互いに見つめ合ってしまう。

途端に恥ずかしくなった。

何だか無償にドキドキして、一個飛ばしで鼓動が速まる。手には汗が滲み、それをユウカに悟られないよう僕は必死だった。こういうことは、やっぱり男の方から言うんだろうか。

少し視線をズラして、もう一度ユウカの方を見る。

今度は大丈夫だ。

「あ、あははっ。」

でも、ユウカは俯いていた。震える声で笑った。

「ごめんねっ。わたし、」

それは僕らに、唐突に降ってきた。
きつと僕らが余りにも綺麗過ぎて、神様が天罰を下したのだ。
そう思えば、ずいぶんと気が楽だった。

「ごめんねっ。」

そう言って、ユウカは、
真っ白な服に真っ赤な血を吐いた。

(。▽。；ノ)ノ

(◡◡;ノノ? (後書き)

ご意見、ご感想お待ちしておりますm
┌
└
m

(。A。;;ノ)ノ？

ユウカが何も話さなくなってから一ヶ月が経った。あの日、僕らが屋上にいた時のことは、もう殆ど覚えていない。特にユウカが倒れてからの記憶はグチャグチャしていて、何一つ思い出せなかった。ユウカの病名は分からなかった。直接立ち会えたのは親族だけで、僕は手術中のランプが消えた後も、緊急治療室には入れてもらえなかった。

看護婦さんによれば

「もう少し遅れていたら、死に至った可能性もあるんですよ……」
と、いうことらしい。

馬鹿な話だ。

結局、全部僕が悪いのだ。

僕がユウカに無茶をさせてしまったから……。

初めて見るユウカの父は、何処からか炎霊祭の話を嗅ぎ付けたようで、部屋に入るなり僕を殴り飛ばした。怒りなんて微塵もなかった。当然の報いだった。

手術から五日後、僕らの部屋に帰ってきたユウカは、まるで眠っているようだった。揺り起こせば、すぐにでも起きそうな、そんな淡い希望が僕を取り巻いた。

植物人間状態、所謂脳死。

だから一生懸命、言葉をかけた。何日も何日も。でも、届かなかった。ユウカと僕の間にある目に見えない何かに阻まれて、言葉という言葉は墜ちていった。どうしようもなくて、涙が流れた。

そのうちユウカは部屋を移動した。僕の隣のベッドには知らない誰

かが居座っていた。

最初の一週間は、ただ喚き続けた。

次の一週間は、自分を卑下し続けた。

次の一週間は、何をしても生きた心地がしなくて、ただ過ぎていく日々に色が無くなっていくのが分かった。

死にたい、と、思えた。

そして、一ヶ月が過ぎた。

次の一週間が始まる。

何も見たくなかった。

何も、何も。

疲れたのだ。何かに希望を持つことも、綺麗な夢を見ることも。

何もかも。

目を開くと、下らない一日が始まる。最近は何でも寝ても、疲れが取れなくて、外に出ることも少なくなった。朝日は既に姿を変えて、昼の暖かい陽射しになっている。もう2月の下旬。殺風景だった部屋には色々と家具が置かれた。全部、隣の患者の物だった。

レトロなテレビは撤去された。古いオーディオも、来週には新しい物にするらしい。

ユウカとの思い出が消えていくのが分かった。涙は出なかった。もういやと言うほど泣いたから。

結局僕は、何もすることが無くて、ベッドに倒れ込んだ。

「あなた、来週には復帰できるそうなんでしょう？ヒロシも夜中ずつと、パパー、パパーって。あなたがいないと寂しいわ。」

「すまん。もう少しの辛抱だから……」

カレンダーを見れば、今日は休日だった。隣の患者にはお見舞いが

来ていて、たぶん奥さんとその子供だろう。ずいぶんと楽しそうだった。

死にたいと思った。

理由はどうでも良かった。

死にたかったのだ。

「ちいーすっ。」

景気の良い声と共に、突然扉が開け放たれた。扉と壁が激突し爆音がする。隣の患者が驚いて悲鳴をあげていた。扉の方を見て、僕も驚いた。

「斎藤さん……」

そして、もう一度驚いた。しばらく誰とも話していないせいとか、僕の声は予想以上にガラガラで、自分の声だと思えなかったからだ。

「何だ、何だ？ まだ生きてんじゃないか。全然大丈夫だな！」

何が楽しいのか大声でガハハと笑って、僕の背中を叩く。斎藤さんは、前に見た作業着とは打って変わって、パーカーにジーンズという普段着を着ていた。

そして、捨てられた筈のレトロなテレビを抱えていた。

「お前さ、なんか最近は飯も食ってないんだって？ 元気だせよな。どうせユウカのことで悩んでるんだろ？」

斎藤さんはそう言いながら最新型のテレビを退かした。

「ちよちよっ！ 何やってるんだっ、君は！？」

それを見ていた隣の患者が慌てて止めに入るが、斎藤さんが一睨みすると急に大人しくなってしまう。

「わりいな。このビデオに対応してるテレビは、これしかねえんだ。」

そして、一本のビデオテープを取り出した。

「ユウカはな、別にお前のせいで、ああなった訳じゃねえ。何でもかんでも勘違いして、自分のせいにすんなよ。」

テープは、ゆっくりとビデオデッキに吸い込まれる。しばらく、抑揚のないニュースアナウンサーを映していたレトロなテレビは、次の瞬間、ユウカの、ユウカの笑顔を映し出していた。

『え、なに？嘘っ？ビデオっ！？
ダメダメっ。こら、斎藤さんっ！』

目を見張った。

炎霊祭だった。

酷く遠い記憶のように感じた。

ユウカの笑った顔も、

ユウカの怒った顔も、

ユウカの悲しんだ顔も、

ユウカの照れた顔も、

ユウカのどうしようもない時に見せる飽きた顔も、

ユウカの無防備な寝顔も、

あの日、ユウカが見せた何とも言えない顔も、

全てが、僕の脳裏を走り抜けていった。震えた。嗚咽が漏れた。涙が溢れた。もう泣けない、そう思ってたはずだった。

「好きなんだろ？ユウカのこと……？……じゃ、笑ってやれよ。」

斎藤さんはテレビを眺めながら、ベッドの縁に座り込んだ。口には火の点いていないタバコを銜えている。

僕らはきつと、世界から見たらミジンコのような存在で、今日にも明日にも消えて無くなってしまう程ちっぽけな生き物で、だからこそ、今ここに、生きるための意味ってものを必要としていて。

そんな僕にとっての生きる意味は、ユウカが居ること、そのものだった。

だって、ユウカは、色のない僕の世界に色を見せてくれたのだ。今度は僕がユウカに“色”を見せる番だ。

「斎藤さん。」

「んあ？」

「ありがとうございます。」

「良いつて、良いつて。」

斎藤さんは、そう言ってヒラヒラと手を振った。レトロなテレビに炎霊祭の塔が映る。酷く胸が痛かった。

フワリと、火の点いてないタバコから煙があがった、気がした。その見えない煙を全て吸い込んで、僕は斎藤さんの目を見た。

「ユウカの所へ行きます。」

「そうするといい。」

気が付けば、僕は病室を飛び出していた。裸足で感じる2月の廊下は、冷えた鉛のように、ただただ冷たかった。久しぶりに肌で何かを感じて、僕は笑ってしまった。

笑えて、笑えて、止まらない涙が口元に滑り込んだ。

すれ違う人々が不審な目付きで僕を見たが、僕の頭は、これからユウカに話す下らない話題でいっぱいだった。

(。▽。；ノ)ノ

「そう、それで『月影バンパイア』は終わり。まさかね、カゲヤと付き合うなんて……。ユウカも驚いたでしょ？だって、最後の最後まで月野君で引っ張ってたのに、結局はバンパイアの血がなんなのでカゲヤと付き合うんだから……」

綺麗な夕日が、姿を見せる午後4時。ユウカの新しい部屋は南向きで、最後の灯が窓辺から差し込んでいた。今の方は、前の二人部屋よりちよつと狭くて、それでも一人では広すぎた。そして、部屋の中央、沢山の医療機器に繋がれた、あの日と何も変わらない姿をしたユウカがいた。一定の拍動が機械音として変換されて、エコーのように部屋に反響する。

静かだった。

「……………」

誰かが言っていた。人は死んだら、死の世界に行く。じゃあ、ユウカは今どこにいるんだろうか。
いや何処にもいないかもしれない。
何を考えているんだろうか。

いや何も考えていないかもしれない。

僕の心臓の音が、やけに大きく聞こえた。それくらいに静かだった。だが唐突に、その沈黙は破られた。音のした方を振り返れば、何処かで見たような看護婦さんが、大量の書類を抱えて部屋に入ってくる所だった。

「篠田君、ここに居たのね。色々探し回っちゃったわ……。」

看護婦さんは、そういつて荷物を丸テーブルにドカリツと置いた。

「どうしたんですか？」

「喜んでよっ？…退院できるわ！」

驚いた。

どうやら予想外の反応らしく、看護婦さんは溜息をついていた。

「どうしてですか？」

「肝臓の提供者が見つかったの。」

何と言えいいのか、僕には、よく分からなかった。喜んで良いのか、悲しむべきなのか、何一つ分からなかった。

「誰なんですか？」

「何が？」

「提供者。」

「……………」

その僕の一言で看護婦さんは言葉を詰まらせた。波のように押し寄せる沈黙が再び僕らを包んだ。聞こえるのは、ユウカの拍動を示す機械音だけ。やがて、沈黙の一波に流されて、看護婦さんの言葉が僕の鼓膜を捉えた。

「……ユウカちゃんよ………」

（△。；ノ）ノ

(。∇。；ノ)ノ？

吐き気がした。

おかしい。笑えた。

みんな同じ顔に見えるんだ。

人が人に見えなかった。みんなみんな、どっかからやってきた宇宙人みたいに思えた。

世界が揺れている。

僕が震えてるのか。

すれ違う人々が、なんかの脈絡に見えた。みんな僕の周りを恐ろしいほどの速度で駆け抜けていた。この流動に触れたら、体が千切りになりそうだ。

雑音が僕の頭の中を叩き続ける。頭が割れて、液体が漏れたらどうするんだ？

やめろよ。

うるさいんだよ。

だまれよ。

頼むから。

ああ、くそがつ。

再び吐き気が襲い掛かってくる。何を我慢してるんだろ。

吐けばいいのに。

大人はクソだと思った。

いやたぶん違う。

違うけどクソだと思わなきゃ、体が、脳が、はち切れてしまいそうだった。

どうして、現実を、あんな簡単に認めることが出来るんだろうか。夢がないんだろうか。きっと現実に追われて追われて追われて、

何も見たくなかったんだ。

現実ってなんだ？

夢ってなんだ？

なんで、違うんだ？

全部、同じじゃないか？

狂ってる。

この世は狂ってる。

どうして、みんな、

現実と夢の違いが分かる？

体が痛くて、痛くて、部屋には這って戻った。いろんな音がした。
何も聞きたくなかった。

口元に伝う涎を拭い、必死にベッドに縋り付いた。

頭が痛い。

体が痛い。

吐き気がする。

生きていて、何も意味がなかった。

「ああ、」

掠れた声が聞こえた。

部屋に戻れば吐き気も大分マシになった。

動かない足が煩わしかった。いっそ千切ってやった方がいいのかもしれない。

笑えた。

必死に、普通の僕に、いつもの僕に戻ろうとするけど、脳は何故か

それを拒絶した。

溜息を吐いたら、内蔵が飛び散る気がした。

何だか、隣がうるさくて、頭を鈍器で叩かれている感じがして、僕は床をのたうちまわった。

必死にオーディオを引っ張り、抱き寄せる。

ユウカとの数少ない思い出の一つだった。

笑えた。

ユウカは、僕のために死ぬのだ。

そこにはユウカの意味もない。じゃあ、どうして今まで生きていたんだ？ 生きるってどういうことだ。ユウカは？ ユウカの存在意義は？

笑えた。

震える手でCDを掴む。それを、なんとかしてオーディオに入れようとするが、僕の意識に反して何度も検討違いの所にぶつかった。

突然誰かが、僕の手を掴んだ。

誰だろう？

顔がなかった。

見たことある輪郭だった。

ああ、隣の人か。

本当は良い人なのに。心の何処かで妬んでいて、何の理由もないのに恨んでいる僕がいて、そんな自分が

笑えた。

やがてスピーカーから、ベースの低い旋律が僕の耳に流れ込んだ。
懐かしい。

ギターのリフレーン。

滑らかに音を叩き出すドラム。

ユウカの好きな曲だ。

穴が開いてボロボロになった心に、ユウカを感じた。溢れ出すのが分かった。

この世界はよく分からない。

何が正しいのか。

正しくないのか。

自分が正しいのか。

正しくないのか。

生きるってなんなのか。

死ぬってなんなのか。

『綺麗よ？死の世界は――』

旋律が僕を誘う。

オーディオを放し、僕は這うように一本のナイフを握りしめた。

あの日、ユリカが僕に突き刺した、幻のだったはずのナイフ。鈍い色で、眩しい程の光を反射していた。背筋が震えた。

死の世界。

ユウカは、きっとそこにいる。

ナイフを持った手の、震えが止まった。

吐き気はしなかった。

頭も痛くない。

体も痛くない。

隣の患者の顔もハッキリと見えてた。

星のない夜空。

2月の、

2月最後の朧月。

綺麗じゃないか。

何も見えないほど真っ暗。

だけど、ユウカが見せてくれた世界は、

やっぱり綺麗だった。

笑えた。

コンセントにナイフを刺しこむ。

脳内が痺れた。

僕を中心に七色の光が迸る。まるで虹のように輝く花火を目の前で
見ているようだった。光は空間にドロリと広がると、やがて螺旋状
に形を成していった。

掻き鳴らすギターのストロークが僕を突き抜けた。

音と共に光の粒が、視界いっぱい揺れ動く。その一粒に触れると、
体が溶けていくのが分かった。

『綺麗だ。』

甘い電流が僕の身体に流れ込む。目を開いても閉じてても、世界は七
色だった。艶やかな夜風が僕の芯から溢れた。

鉄の味がした。

何処にいるんだろう。

どうして天井を見ているんだろう。

どうして震えているんだろう。

どうしてこんなに、綺麗なんだろう。

笑えた。

『はは、あははは』

気が付けば、僕は真っ白な雪が降る町中にいた。

世界は真っ白だった。

見回せば、辺り一面真っ白。ビルも、車も、歩道も、歩道に生える木々も、電柱も、赤いはずのポストも、みんなみんな、

真っ白。

白白

白白白

白白白白白

影さえ真っ白だった。

吐いた白い息が世界に溶け込む。何もかもが、僕がいた世界と似ている。でもここには人が居なかった。だから、この世界は静かだった。

歩き出した。

地面はしっかり認識しないと、踏み外してしまいそうな程フワフワしている。真っ白な道に、真っ白な僕の足跡がついた。

どうしてここにいるんだろう。

そうだ。

ユウカを探さなくちゃ。

消えてしまいそうな意識の中。それだけを頼りに、僕は走り出した。狂ってしまいそうな程、綺麗な、真っ白な世界の中を。

（。∇。；ノ）ノ

ずいぶん走った気がする。かれこれ20分は探しつづけた。でもユウカの姿どころか、手がかりの一つさえ見つからなかった。

もう足の感覚なんて無かった。フワフワと地面に沈み込んでる気がした。

もしかしたら、すれ違ったのかもしれない。

もしかしたら、もっともっと遠くに居るのかもしれない。

そう思えば、思う程、この真っ白な世界に取り付かれる錯覚に陥った。

降り止まない真っ白な雪が僕に降り積もる。冷たくはなかった。ただ、体に纏わり付いた雪を払おうとしても、何故か落ちなかったのだ。嫌な予感がした。

だが、答えに辿り着く前に、突然、僕は何かとぶつかった。驚いて、尻餅をつく。真っ白で気付かなかった。ようやくそれが、人の形をした何かだと分かった時、僕の視界は無数の何かで埋め尽くされていた。

『なっ、これ？全員、人？』

信じられなかった。車が走る筈の道路には、それこそ、何か別の生

命体のような人の大群が蠢いていたのだ。ゆらりゆらりと、顔のない人間が僕を覗き込む。

背筋が震えた。

無意識の内に叫んでいた。

『うああああああああっ！』

綺麗だった。綺麗すぎた。

綺麗すぎて、色がなかった。

真っ白だった。

走って、

走って、

走って、

走って、

走って、

走って、

白い何かとぶつかる度、足を縛れさせた。何度も転んで、フワフワする地面に倒れ続けた。それでも必死に立ち上がった。

この世界には、何も無かった。

善も、悪も、

何も何も、

何も正しくない。

何も悪くない。

決める必要がないのだ。

綺麗だ。

綺麗な世界だ。

『くはははははっ！』

笑えた。

僕は、こういう世界を望んでいたのか、そうなのか？

これが『死の世界』？

何もないじゃないか。

そうか、全て死んでいるのか。

馬鹿みたいに、そうやって結論付けて、僕はひたすら走り続けた。
どうして走ってるんだろうか。

あいつらみたいに歩きたい。

もう疲れた。

どうして走ってる？

どうして？

通りを抜けると広場に出た。

もう走れなかった。これで良いと思った。ヨロヨロと倒れ込み、フ
ワフワとした地面に包み込まれる。幸せだ。

何も感じなかった。

もう動かなくていいのだ。

何もしなくていいのだ。

意味を考えなくていいのだ。

何も、何も。疲れた。

目を閉じると真っ白だった。

開いても真っ白だった。

笑えた。

あれ？

どうして

どうして、

どうして、今、笑ったんだろう。

ぼやける視界の中。

真っ白な雪が降りつづける中。
訳も分からず、顔を上げた。

雪の降る真っ白な十字路。

真っ白な自動販売機。

真っ白な理髪店。

真っ白な信号機。

真っ白な音を響かすゲーセン。

真っ白な光を照らす電球。

真っ白な車。

真っ白な曇り空。

真っ白な人間。

倒れ込んだ真っ白な地面。

そして、中央にそびえ立つ真っ白な塔。

よく見れば、それは塔なんかじゃなかった。真っ白な人間の固まりだった。敷き詰められた無数の人間が息もせず、眠っていた。

どうしてか、僕は、ゆらりゆらりと立ち上がっていた。見れば、僕

は、真っ白な手をしていた。

あそこなら、

あの塔なら気持ちよく眠れそうだ。足の感覚はないのに僕は歩き出した。立ったまま眠ってしまいそうな意識の中、ただ足を前に前に動かした。

もう少し、

あと少し、

もうちょっとで、

あとちょっとで、届く。

突然、僕の視界を誰かが塞いだ。

なんだ？

邪魔だなあ。

僕が先なのに。

割り込みなんてしやがって。

僕が先なんだよ。

……………。

お前、

なんか、

変だな。

みんなと違う。

ま、どうでもいいけど。

早く、僕が先なんだから。

ほら、早く。

……。

ホントに変だな。

君、なんかしたのか？

なんでそんな、

どうしてそんな、

どうして？

どうして色があるんだ？

変だな。

どうしてだかな。

君は誰なんだ？

どうして、ここに？

でも、綺麗だ。

変だな。

痛いよ。

胸の辺りが痛いんだ。

なんだか、

おかしい。

こんなに眠いのに。

早く、寝てしまいたいのに。

何か

何か

なにか忘れた気がするんだ。

そうか。

おやすみか。

…はは。

違うな。

もっと、こう。

そうだ。

思い出した。

えーと、

ほら、

なんというか、

『君が好きだ。ユウカ。』

たぶん、こんな感じ。

ほら、

君はまだ

色があるから、

ここは、まだ早いよ。

変わりに、

僕が寝るから。

じゃ

おやすみ、

ユウカ。

(。▽。 ;ノ)ノ

「308、308。」

今日は、久しぶりの連休の初日。本当は恵理子と沢見と三人で女子会でもやる予定だったのに、あの主治医の松田のせいで、こんな時間も夜勤。ホントは全部、ミスしたアイツが悪いのに何故か尻拭い。腕は良いのに、度胸がないんだよね、うちの医者は。

なんて眩きながら、冷えた午後8時の病棟を歩いていく。辺りは既に真っ暗で、星一つない夜空が広がっていた。

夜の病院は正直、ナースを五年もやれば慣れてしまった。ただ、爺さん方が尻を撫でてくるのだけは慣れない。でもどうやら、次の部屋は女の子らしい。よかった。それも脳死だとかなんとか。

「お、ここか。」

ようやく308号を見つける。ガラガラと扉を開き、部屋に入る。中は真っ暗だった。

仕方なく電気を点ける。

バチッ。一瞬、蛍光灯が点滅した。

変え時だろうか。

溜息をつき、部屋の真ん中で眠る少女を見つめる。

「脳死ね……」

そんなことが信じられないくらいに、少女は、すやすやと眠っていた。揺り起こしたら、起きてしまいそうなの……そんな。

「まさか……ね。」

笑って、カルテを取り出す。

次の瞬間、

少女の、

少女の臉が動いた。

驚いて、カルテを取り落とした。

「嘘っ!?!」

だが、今度は、ハッキリと臉が動くのを見た。奇跡だ。今度は指がピクリと反応する。この病院が始まって以来の、いや、あの塔と並ぶほどの一大事だ。

すぐにナースコールを連打する。なんだ、やっぱりあの主治医はダメダメだ。

そう呟きながら、少女の手を握る。その手には小さな力が込められ

ていた。

小さな、小さな。

それでも、しっかりと。

今年最後の雪が降っている。

こうして2月の幕が下りた。

そろそろ、春がやって来る頃。

それでも、綺麗な色をした、この冬が、しばらく忘れられそうにもない。

F i n

(。V。;;ノ)ノ？(後書き)

情景描写が少ない。
分かります。

感情が定まってない。
人間そんなもんです。

言い回しが下手くそ。

日本に住んで“まだ” 12年(笑)

コンセントの所が謎、とか

ナイフ、どっから出てきた？とか気にすんな！

それでも面白いと言ってくれる方、感謝感謝ですっ！
続きは、ないです。

今度は、もっと暖かい話が書きたい……………。

あとパソコン欲しい…。(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7302q/>

ものくろセカイ

2011年10月5日23時20分発行